

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：14301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20049

研究課題名（和文）近世東アジア地域における通事制度

研究課題名（英文）The Interpreter System in the Early Modern East Asian Region

研究代表者

張 子康（Zhang, Zikang）

京都大学・スーパーグローバルコース人文社会科学系ユニット・特定助教

研究者番号：70966283

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000 円

研究成果の概要（和文）：研究期間内に、主に以下の2点の成果を達成した：

第一に、清朝 - 琉球関係における通事の制度的実態と具体的役割を解明し、その成果を博士論文にまとめ、一部は雑誌論文として公刊した。第二に、清朝 - 西洋諸国関係における「カントン通事」の制度を再検討し、従来特別視されていたこれらの通事を清朝の通事制度内に位置付ける試みを行った。その初歩的な成果は共同研究班で発表した。

その他、具体的な成果には至っていないものの、清朝 - 朝鮮関係における通事に関する史料の精読を着実に進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は従来研究が手薄であった清朝の通事制度について、総体的・実証的な解明を目指した。これにより、清朝と各国間の関係がいかに維持・運営されたか、及びそこにおける仲介者（通事）の役割が具体的に明らかになった。また、本研究の成果は、「通事」をはじめとする仲介者の存在と活躍を通して、前近代・近世東アジア地域の国家間関係の特質を理解する切り口を提供するものである。さらに、グローバルヒストリーの隆盛を受けて「仲介者」の役割がかつてなく注目を集めている中、本研究は仲介者をめぐるグローバルな歴史研究の潮流にも大きく資するものである。

研究成果の概要（英文）：The research yielded two significant outcomes:

First, the institutional reality and specific roles of “tong-shi/interpreters” in Qing-Ryukyuan relations were clarified, and the findings were summarized in a doctoral dissertation, with portions published as journal articles. Second, the system of “Canton Linguists” in Qing-Western relations was re-examined, attempting to situate these interpreters, previously regarded as exceptional, within the broader Qing interpreter system. The initial results of this study were presented at a research conference.

Additionally, although no concrete results have been achieved yet, steady progress has been made in the close reading of historical documents related to the Qing-Korean relations, also focusing on the interpreters.

研究分野：東洋史

キーワード：通事 近世東アジア 清朝 仲介者 国際関係

1. 研究開始当初の背景

報告者はこれまで、19 世紀の琉球国をめぐる国際関係を主に研究してきた。近世琉球は、清朝との朝貢冊封関係を維持しながら、薩摩藩を通して徳川日本の幕藩体制にも組み込まれ、中日関係の狭間で、自国存続のために両関係を管理、調整する自律的国家運営を行っていたと論じられる。19 世紀以降はこれに西洋諸国との関係が加わり、調整は更に複雑化していく。申請者は、現場において実際に調整を担った通事に着目し、その働きを通して、琉球の「自律的国家運営」の実態を明らかにしてきた。その過程で、通事という切り口から近世東アジア国際関係の実態を総体的に把握する、本研究の着想を得た。

近世東アジア各国における通事を主題にした先行研究は、そのテーマ、視点双方において偏りがある。清朝と西洋諸国の通商関係において活躍した広東通事や、江戸時代長崎における唐通事や阿蘭陀通詞、あるいは対馬の朝鮮通事などが注目を集めてきた。だが、先行研究の多くは個別具体的な人物・事件の検討や、各国の対外関係史の範疇における検討に留まるものであり、せいぜい通事が仲介した二国間に視野を広げるに過ぎず、マクロな視点から東アジア全域で通事制度が設けられた意義を考察するものはない。特に中国（清朝）における通事研究は史料の制限もあり、西洋諸国以外、朝貢国等に対応した通事たちの検討はほぼ皆無で、甚だ一面的・断片的なものとなっている。

2. 研究の目的

本研究は、清朝と東アジア各国との関係において、仲介者として機能した「通事」の制度的実態を解明し、その具体的な役割を検討する。これを通して、近世東アジア地域の国際関係における通事制度の重要性を指摘するのみならず、通事という切り口を通じて、近世東アジア地域における国際関係の特徴を明らかにすることを目指すものである。

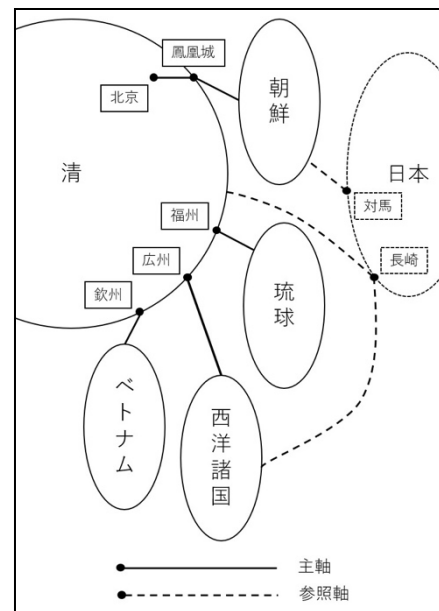
3. 研究の方法

本研究において、下記 2 つの仮説を立てた。

仮説① 清朝において、対外関係に伴う具体的・実質的な交渉は基本的に辺境地域に局限化された。相手国側から見れば、清朝への入国地点に自国の拠点（通事館）が設けられ、実質的な清朝との交渉はそこで通事たちを介して行われた。

仮説② これらの通事は、清朝人であり、清朝当局による管理を受けたが、経済的には相手国側に依存した。近世期においても通事はこのような曖昧な立場、マージナル（境界）性を有しており、まさしくこの点において通事は有効な仲介者として機能し得た。

本研究の**主軸**として、清朝と朝貢関係にあった琉球<福州>、朝鮮<北京・鳳凰城>、ベトナム<欽



州>、および互市関係にあった西洋諸国<広州>を取り上げ、それぞれの関係における通事制度の在り方を実証的に解明する（<>内は清朝における各国の拠点所在地）。その際、中国側史料の不足を補うために、相手国側の史料を重点的に活用する。

一方で、東アジア他地域、特に日本に所在した阿蘭陀通詞<長崎>、唐通事<長崎他>、朝鮮通事<対馬他>等については、既に豊富な研究蓄積がある。これら先行研究を参照軸としつつ、近世東アジア全域に当てはまる通事制度の概観を描き出す。

4. 研究成果

報告者の能力に対してあまりに大きな問題設定であり、2年間の研究期間では極めて部分的な成果しか生み出せなかった。主な研究成果は以下2点ある。

（1）清朝-琉球関係における通事制度とその役割の総体的な解明

清琉関係においては双方に仲介役としての通事が存在した。清朝側は福州に「土通事（河南通事）」と呼ばれる通事が設けられていた。琉球側は、対清関係を請け負った久米村と呼ばれる人的集団があり、その成員が朝貢業務に際して「存留通事」「朝京都通事」等の通事職を担っていた。このうち清朝側の土通事については、報告者は既に研究期間前に清琉関係におけるその具体的な働きについて検討を行っている¹。

本研究期間内では、琉球側人員である久米村の具体的な検討を進めた。その際、法政大学沖縄文化研究所蔵『楚南家文書』を重点的に活用した。「楚南家文書」は、近世久米村士の一族である「魏姓楚南家」が所蔵していた蔵書・文書類から成り、近年特に着目されている。『楚南家文書』を中心とした分析から、清琉関係における久米村の働きについて、以下の新しい史実が明らかとなった：

第一に、世代を超えた清琉間の人的ネットワークの形成・維持である。福州の地方衙門（政府役所）に勤務する胥吏（下級役人）、幕友（地方官秘書）といった人員と、土通事を通じて、緊密な関係性を築いていたことは前稿で既に指摘したが、『楚南家文書』からはその関係性の形成・維持に関する具体的な在り方が知り得た。特に着目すべきは、このようなネットワーク・関係性は世代を超えた家同士の繋がりとして機能しており、さらに特定の家の関係性は久米村内で共有されていたのである。第二に、ネットワークを活用した徹底的な情報収集と、情報に基づく琉球の戦略性である。19世紀後半、朝貢使節の進京不能、尚泰王冊封の度重なる延期と、琉清関係の根幹部分が動揺を重ねる中で、琉球側は清朝国内で徹底した情報収集を行い、集めた情報と先例とを組み合わせ、戦略的に一つ一つの難題を乗り越えていった。情報収集や関係各所への根回しに際しては、上述した人的ネットワークの存在が極めて重要な役割を果たした。

このように、19世紀後半にあって動揺する伝統的清琉関係が維持・運営され続けた背景には、双方の通事の働きが大きいものがあつたことを具体的に実証することができた。この時期琉球が新たな関係構築を余儀なくされた西洋諸国に対応した新しい一群の通事（西洋語通事）との検討と合わせ、研究成果を「19世紀琉球国の対外関係：「通事」の働きを中心に」と題する博士論文にまとめ上げた。

（2）清朝-西洋関係におけるカントン通事の制度的再検討：福州との比較を伴って

琉清関係における通事とは違い、いわゆる「カントン体制」内で仲介役を勤めたカントン通事（英語史料では *Linguists* と呼称）に関しては、多くの研究が既にある。一方で、従来の研究は「通事」定義が曖昧であり、一般名詞としての「通事」と固有名詞としての「通事」の区別が不明瞭であったり、マクロな視点の欠如といった不足点も多い。

本研究の目的に鑑み、専門職として制度化された中国側の通事に焦点を絞った上で、カントン通事を「清朝の通事制度」内でいかに位置付けられるか、という視点から再検討を行った。その際、琉清関係における通事との比較の手法をとった。

上記の問題関心に即して、Morse, H.B.. *The chronicles of the East India Company, trading to China 1635-1834*, vol.1-5, Clarendon Press. 1926-29, *The Chinese Repository, A Chinese Commercial Guide*, 『粵海関志』、『澳門記略』といった基本史料を精読、福州の土通事と比較して、以下のような発見を得た：

第一に、制度面からは、カントン通事と福州の土通事とは、共通点が多くみられた。①若干名の正規通事が配下の補助通事を従えて業務を担っていた点、②正規通事の任命・認可は清朝当局が行うが、外国側の意向も強く反映されていた点、③経済的に外国側に依存していた点、④業務内容は貿易面と政治・交流面という2本の柱から成っていた点、などである。第二に、その内実を掘り下げていくと、両者の相違点が現れてきた。①福州では正規通事が特定の家によりほぼ独占的に世襲された一方、カントン通事は激しい入れ替わり（競争）がみられる点、②史料から読み取れる貿易面と政治・交流面の比重の違い、③土通事に対する琉球側の信頼度の高さと、カントン通事に対する西洋人の全体的な不信頼、などである。

以上から、カントン通事も清朝他地域の通事たちと同じ制度的基盤を有しながら、その内実は各地域のヴァリエーションがみられることがうかがえた。上記初歩的成果は共同研究班において発表した。

（3）その他

具体的成果にはまだ繋がっていないものの、各種『燕行録』をはじめとする清朝-朝鮮関係における通事に関連する史料の精読を着実に進めることができた。また、現地出張を伴うベトナム・東南アジア方面の資料収集を行った。

i 張子康「河口通事と一九世紀の琉清関係」（『東洋史研究』80-4、2022年）。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1．著者名 張子康	4．巻 4
2．論文標題 牧志朝忠の活動とその意義：近世末期琉球の一通事	5．発行年 2022年
3．雑誌名 琉球沖縄歴史	6．最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1．発表者名 張 子康
2．発表標題 明清期カントン通事の制度的再検討
3．学会等名 京都大学人文科学研究所「20世紀中国史の資料的復元」共同研究班
4．発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------